

Title	リクールとマルセル：反省における迂回と帰還
Sub Title	Ricœur and Marcel : detour and return in reflection
Author	奈良, 雅俊(Nara, Masatoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.147 (2021. 3) ,p.41- 68
JaLC DOI	
Abstract	Paul Ricœur's work is characterized by an interplay of three philosophical movements : reflexive philosophy, phenomenology, and hermeneutics. How was Ricœur's unique philosophy formed? Is it possible to identify a basic motif of his philosophy? To address these questions, we examined the relationship between Ricœur and Gabriel Marcel. Examining Ricœur's views on Marcel's "second reflection" helped us clarify why Ricœur moved to phenomenology and why he followed the tradition of reflexive philosophy. Furthermore, understanding the developmental process of Ricœur's philosophy helped us identify the basic motif of his philosophy—his interest in existence and human capabilities. Ricœur returned to existence, using phenomenology and reflexive philosophy as a detour, and deepened his understanding of human capabilities. Considering the relationship between reflexive philosophy and Ricœur also helped us reveal a significant aspect of ethical reflection: ethical reflection had a structure of detour and return.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000147-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リクールとマルセル

—反省における迂回と帰還—

— 奈 良 雅 俊* —

Ricœur and Marcel: Detour and Return in Reflection

Masatoshi Nara

Paul Ricœur's work is characterized by an interplay of three philosophical movements: reflexive philosophy, phenomenology, and hermeneutics. How was Ricœur's unique philosophy formed? Is it possible to identify a basic motif of his philosophy? To address these questions, we examined the relationship between Ricœur and Gabriel Marcel. Examining Ricœur's views on Marcel's "second reflection" helped us clarify why Ricœur moved to phenomenology and why he followed the tradition of reflexive philosophy. Furthermore, understanding the developmental process of Ricœur's philosophy helped us identify the basic motif of his philosophy—his interest in existence and human capabilities. Ricœur returned to existence, using phenomenology and reflexive philosophy as a detour, and deepened his understanding of human capabilities. Considering the relationship between reflexive philosophy and Ricœur also helped us reveal a significant aspect of ethical reflection: ethical reflection had a structure of detour and return.

* 慶應義塾大学文学部倫理学専攻

序論

ポール・リクールは、自身の哲学の特徴を次のように述べている。「私は自らのよって立つ哲学的伝統を三つの伝統によって性格づけたいと思う。それは反省哲学の線上にあり、フッサール現象学の圏内にとどまり、この現象学の解釈学的変奏たらんとするものである」¹。20世紀の思想のほとんどすべての領域を渉獵するリクールが自らの思想をこのような三つの伝統によって特徴づけていることは、非常に興味深い。このようなリクール独自の思想はいかにして形成されたのか。そこに基本的なモチーフを見出すことは可能なのか。本論文は、このような問いを解明するために、リクールとガブリエル・マルセルとの関係を検討した²。リクールはマルセルを「数少ない師の一人」と述べ、研究者たちも彼の影響に言及しているにもかかわらず、これまでのリクール研究では両者の関係は十分に論じられていない。われわれは、マルセルの第二の反省についてのリクールの見解を検討することによって、リクールが現象学へ移行した理由と反省哲学の伝統に身を置いた理由を解明することができると考えた。このように、リクールの思想の展開の過程を内在的に理解することによって、リクールの思想の基本的なモチーフを見出すことができるとわれわれは考えた。

1. 実存の哲学

1.1. マルセルとの出会い

ガブリエル・マルセルは、フッサール、ナベールと共に、リクールが大きな影響を受けた哲学者である。1934-35年、リクールは奨学金を得て、故郷のレンヌからパリへ来た。1年という短い期間だったにもかかわらず、パリ滞在は「田舎の学生にとって多くの点で決定的だった」³とリクールは回顧している。決定的だったのは、マルセルとフッサールとの「二重の出会い」があったからである。リクールは、友人マキシム・シャステンに誘われて、マルセルの金曜会に出席した。「金曜会」(vendredis)とは、ソ

ルボンヌに近いトゥルノン通り 21 番地の自宅でマルセルが開催していた哲学研究会である。Dosse によれば、マルセルは「リクールを」「目覚めさせる」役割を果たした⁴。マルセルは、参加者が過去の哲学者の所説を引用することを禁じ、参加者自身の個人的な考えや体験に立ち返ることを求めた。発言においては「適切な事例、厳密な説明、正確でぴったりの表現」への配慮が求められた⁵。直接的な経験を対話によって掘り下げていくソクラテス的な手法は、ソルボンヌにおける合理主義や観念論にもとづく講義とは大きく異なっていた。金曜会という「共生と友愛の場は、リクールの哲学的態度の形成において欠くことのできない垣塙」となった⁶。

マルセルの思想の基本的な構えは、1920-30 年代にほぼできあがっていた。リクールがマルセルと出会ったのは、マルセルが「実存と客観性」(1925)、『形而上学日記』(1927)、「存在論的神秘の提起とそれへの具体的な接近」(1933)といった重要な論考を発表し、『存在と所有』(1935)を準備している最中であった。『形而上学日記』や『存在と所有』において考察の対象とされているものは、感覚や身体である。たとえば道を歩いているときに花の香りに気づいた、としよう。「爽やかな香りがする」という経験は科学的な視点からは次のように説明される。花壇の花が香り物質を発し、香り物質の分子の振動が私の鼻に伝達されると、嗅覚の言葉に転写される。この説明では、感覚主体は客体から分離され、「われわれは、感覚作用を情報伝達と同じように考える」⁷。しかし、マルセルはこのような見方とは異なる見方を提示する。「感覚とは、われわれが通常主体と呼びならわしているところのものが周囲の環境に直接的に参与すること」であり、その際に「この主体と環境を分離する真実の境界などまったく存在しない」⁸。

私の身体についても感覚と同様のことが言える。私の身体は刺激を受容したり、あるいは反応したりするための「道具」とみなされるかもしれない。道具として身体を「私は私の身体をもつ」と表現することができる。

このような見方では、私は私の身体に対して第三者の立場をとり、身体を一つの対象、即ち「私ではないもの」として扱っている。しかし、マルセルによれば、私と身体との間には、「私は私の身体である」と言えるほど親密で分かちがたい結びつきがあり、身体を私から分離することはできない。さらに、私の身体は私の世界において特権的な地位を占めている。私の身体は、私の世界を秩序づけるための指標あるいは中心である。私が周囲の事物や他人に対して、私と身体との間にあるのと同じ「親密な」関係をもつのに応じて、世界は私にとって実存してくる。こうして、感覚や身体は情報伝達や道具ではなく、直接的な「参与」(participation)として規定される。参与とは、身体を介して私たちが身のまわりの世界に関わることであり、感覚は私が世界に参与する一つのあり方である。

マルセルは、存在するものを「事物として考えるあるいは扱う」思惟の活動を客体化(objectivation)、客体化によって成立する私たちのものの見方を「客観性」(objectivité)と呼ぶ。そして、客観性に対立するものとして、「実存」を定義する。実存とは「思惟に対して、客観性という事実そのものに含有されている構えに還元されない構えをとる」ものである⁹。

実存とは厳密な意味では、措定されることも概念されることも、またおそらくは認識されることもできないものであり、探求の地平という仕方で認められるだけである。…実存というこの言葉が指示しているものを最も不完全な仕方と言えば、実のところ或る風土(climat)であり、あるいはより正確に言えば、精神が本来の意味で乗り越えることのできない、決して超越することができないと認めざるを得ないものへの参与(adhérence)の領域である¹⁰。(傍点筆者)

主体の精神に内在しながらも、「超越することができない」ものに、マルセルは「形而上学的な優先性」を認めている¹¹。つまり、実存が根源的

であり、客観性は実存から派生したものである。そして、マルセルは、実存の形而上学的優先性を「取り戻すこと」を自らの思想の課題とするのである。

1.2. 第二の反省

客観性に先行しながらも客観性に隠蔽されている実存を「取り戻す」ために、マルセルが採用した方法は、第二の反省である。マルセルによれば、反省は「第一の反省」(*réflexion primaire*)と「第二の反省」(*réflexion seconde*)に大別される。

第一の反省は要するに分析的であり、その本質は要するに、いうなれば具体的なものをその諸要素に分解することである。

しかし、私の考えでは逆の運動もあって、この運動は一種の回復(*reprise*)の運動であり、その本質は、純粹に分析的な手続きのなかで、部分的なもの、また或る意味で疑わしくもあるものを意識し、具体的なものを復権する(*recupérer*)、思惟の次元で回復しようと試みることに存する¹²。

第一の反省は、分析的で(要素)還元主義的な思考である。爽やかな香りがするという経験は、「諸要素に分解」され、花壇の花(客体)から発せさせた/香り物質(情報)を/私(主体)が受信し、「爽やか」という言葉で表現した(転写)と説明される。このような説明は自然科学だけでなく、私たちの日常生活においてもしばしば使われている。しかし、私たちは(要素)還元主義的な説明に対して違和感や抵抗感を感ずることもある。たとえば私が愛情や信頼を寄せていた相手を裏切り、後悔しているという状況を想像してほしい。私がこの経験を諸要素に分解するとき、私は相手をたんなる役割や操作対象としてしか扱っていなかったことに気づく。第一の反省についての反省、すなわち反省についてのメタレベルでの反省が第二

の反省である。「第二の」と名付けられたのは、最初の（要素）還元主義的な思考の前提や条件を後で批判的に問うからである。

第二の反省は、「直接的意識と関わるよりも、むしろ直接的意識を経験として成立させるのにあずかる最初の媒体に、はるかに深くかかわるものである」¹³。この「最初の媒体」に関わるために、マルセルがとった方法は、「諸経験のいわば下を掘り下げて」、そこに彼が「忠実」と呼ぶ「存在への関与を再発見しようとする事」に存していた¹⁴。つまり、他者との関係についていえば、他者との実存的関係において「ともにある」という存在への関与が開示されているのだが、第一の思考が実存的関係を支配関係や道具的關係へと変え、もともとの実存と存在の意味を隠蔽していると考えられる。したがって、存在への関与にまで立ち返って、そこから実存をありのままに照らし出そうとするのである。実存へと立ち帰るためには、存在への関与の探求という「迂回路」を経なければならない。

しかし、この存在への関与の探求はかなり困難な作業である。なぜなら、私自身が存在にかかわっているがゆえに、私は存在から距離をとることも対象化することもできない。このような状況をマルセルは「神秘」と名付ける。

問題と神秘とでは次のような本質的な差異があるように思われる。問題というのは私がぶつかる物、そっくり私の前に姿を現すもの、それだけに私を取り囲み、分解することができるものである。ところが神秘というものは、私自身がかわりを持っているものであり、したがってそれは私において、と、私の前で、とを区別することが、当初の意義と価値とを失ってしまうような一つの領域、とより考えるほかはないものである。¹⁵

マルセルのいう「神秘」(mystère)は、人間の知恵では計り知れない不思議なことや超自然的なことではなく、「問題」(problème)ではないもの、あるいは問題を越えたもの(métaproblématique)である。神秘としての存在への関与、すなわち「存在論的神秘」にアプローチするために哲学者マルセルがとった方法は、演劇作品への転位であった。服部によれば、「主体は絶対に客体になることができない以上、丁度目が自らを見ることができないように、自らを語れないはずである。ではこの主体を「見える」ようにするにはどうするか? 舞台に「転位」するのである」¹⁶。マルセルによれば、「私の存在に対する問いは、私がある仕方では受動的に受け入れるようなある断定、つまり私がその主体であるよりはむしろ台座であるような断定にもとづいている」¹⁷。こうして、「忠実とか希望とか愛というような本当の意味で霊的な若干の所与」に含まれている確信や、機能主義社会において疎外されている個人が感ずる「存在論的要求」(exigence ontologique)が演劇作品へと置き換えられる。そこにおいて、登場人物たちが示す葛藤や苦しみ、後悔と希望の中で存在への関与が証される。

1.3. 第二の反省の問題点

第二の反省は困難を抱え込んでいる。第二の反省が神秘に向けられた思考であるならば、「問題」化できないものを、われわれはどのようにして現実に思考することができるのだろうか。マルセルは、思考を対象化とみなす見方をやめることによって、この難問を解決できると考えた。マルセルは、このような見方に替えて、「直観」による認知という思考を提示する。「思考が、本性を発見しようと努力している当の対象に向かってはたらくだけでなく、思考自身が自分の仕事をやりとげるのに応じて自分自身から生ずる或る種の歌をも、聴きとりうる」¹⁸。そして、このような「聴きとり」を「潜心(集中)」(recueillement)と呼んでいる。

リクールは、第二の反省をどのように見ていたのか。リクールは、第二の反省がマルセルの思想の「本来の意味において哲学的なモメントを構成

している」と述べる¹⁹。マルセルは、第一の反省に基づく合理主義、科学主義、機能主義を「抽象の精神」と呼び、これらに対して時に過剰すぎるほどの拒絶の態度を示す。これに対して、リクールは、第二の思考は第一の思考との相互関係の中で働くものではないのかと考えた。リクールは、第二の反省を「概念や語のレベルでの訂正作業」とであると解釈している²⁰。第一の反省が直接的経験を諸要素に分解するとき、諸要素は概念や語によって示される。これらについて反省する第二の思考も、やはり概念や語を使ってなされるはずである。しかし、いずれの作業においても、一挙に適切な言語表現を与えることはできない以上、より正確な認識を目指すためには、訂正作業を行いつづけるしかない。実際、マルセル自身も「(神秘を)あらためて理解するためには、常に問題的なものの秩序を参照しなければならない」と述べていることから、リクールの解釈は必ずしも外的外れとはいえない²¹。実存を回復するところに第二の反省の意義を認めながらも、リクールが第二の反省を言語化の作業として解釈しているのは、「存在論的神秘」への転回が哲学の営みを挫折させるとリクールが考えるからであろう。ここにおいて、われわれはマルセルとリクールとの間の深い対立点を見出すことができる。

直観かそれとも訂正作業かという第二の反省をめぐる両者の対立は、哲学と信仰の関係というもう一つの対立を生み出している。『現象学運動』の著者 Spiegelberg は、リクールが 1948 年に出版した『ガブリエル・マルセルとカール・ヤスパース』の中に「明らかな批判ではないが、マルセルの実存哲学に対するリクールの留保の徴候」が見出される、と述べている。リクールによれば、実存から存在論的神秘へと踏み出したマルセルの思想は、緊張と分裂を抱え込むことになる。実存には客観性へと転化する「裏切り」がともなう。マルセルによれば、絶望は、あらゆる形で、あらゆる時に、あらゆる度合いで、生まれてくるものである。「われわれの世界の構造そのものが、かかる裏切りを、たとえわれわれに強いているのでは

ないにしても、すすめているように思われる」²²。しかし、「希望」や「忠実」などの存在論的神秘について述べたテキストにおいてはマルセルは存在の神秘の「証し」を認知することで満足しているように見える²³。あたかもキリスト教信仰による救済を追認しているかの印象を与える。実存と信仰の間のこのような緊張と分裂を前にして、リクールは「信仰の抒情性は実存のドラマを一掃したのか。世界はわれわれを裏切りへといざなうことをやめたのだろうか」と問う²⁴。Speigelbergによれば、「これ以降、リクールの哲学的著作の中心は現象学、特にフッサール現象学に移行した」²⁵。後に、リクール自身も「まさしくマルセルの著作との長いつきあいによって私に示唆された疑問が、私をフッサールの著作へと帰還させた」と述べている。それは、マルセルの実存的存在論が自らの言説の地位（位置づけ）を説明することが難しいのではないか、という根本的な疑問である。神秘と問題の対立を単純に非弁証法的な仕方で打ち立てるならば、それは直ちに哲学の企てそのものを崩壊させ、哲学-宗教的な信仰絶対主義（fidéisme）に変質させるおそれがある²⁶。リクールがマルセルに感じたのと同じ疑問を、杉村はマルセルの思想が急速に影響力を失った理由という視点から指摘している。

対象化する思考がいったん転換され、「参与」の状況が現出すると、そこで存在の神秘が証しされているということに疑いが向けられることはけっしてない。問いはそこで停止し、「われあり」の「われ」はただ存在の充実に浸されるのみである。だが、そうになると、存在論的神秘が知ではなく信仰の事柄であることをどれほど強調しようとも、この信仰自体が別種の知のようになり、存在論的神秘がある種のドグマの性格を帯びることは避けられないのではなからうか。その場合、マルセルの思索は、キリスト教のドグマを前提にはいなくても、哲学的問いの徹底性を殺ぐような仕方でも宗教的なものを密輸入していると

言わざるをえないであろう²⁷。

マルセルにとって哲学とは、存在論的神秘に対する反省である²⁸。しかし、この反省が知的な作用に基づいていないとしたら、そこに宗教的なものを密輸入しているとしたら、そのような哲学に哲学的言説という地位をみとめることはできないであろう。たとえ神秘が「表現できない具体的なもの」であるとしても、哲学者は哲学と信仰の境界線を守り、哲学の限界内にとどまるべきではないのか。おそらく、リクールはこのように考えたのであろう。

2. 実存哲学から現象学へ

2.1. フッサール現象学との出会い

フランスにおける現象学の受容については、これまで 1920 年代半ばに受容期が始まり、1936 年のサルトルの「自我の超越」と『想像力』を境に、生産的段階に入るという見方が一般的である。近年では、1910 年から 1939 年までを 4 つの段階に分け、哲学だけでなく宗教思想の観点からも現象学の受容を検討した研究が登場している²⁹。これらの先行研究では、マルセルは現象学の先駆者 (pacemaker) で盟友だが、主唱者 (protagonist) ではないと位置づけられている³⁰。マルセルは、ベルクソンやブロンデルと共にフランスにおけるフッサール現象学の重要な先駆者と考えられるが、ドイツ発祥の現象学を紹介することに直接寄与したわけではなかった³¹。

リクールがフッサール現象学と出会ったのは、1934 年である。それは、マルセルを通してではなく、『イデーニ I』の英訳版を読んだことによってである。その後、リクールがフッサール現象学を本格的に研究する時間を得たのは、皮肉にも、パリではなく捕虜収容所においてだった。第二次大戦に動員され捕虜となったリクールは『イデーニ I』の原著を入手した。ドイツ語以外の本の持ち込みが許可されなかったとはいえ、『イデーニ I』

を選択したことは偶然とは思われない。さらに本文の欄外の余白にびっしりとフランス語訳が書かれている現物を見ると、われわれはフッサール現象学への並々ならぬ研究心を感じることができる。

具体的なものを回復するマルセルと「事象そのものへ」帰れとするフッサールの間には、直接的経験への回帰という点で共通性がある。リクールが、フッサール現象学に強い興味をもったのは自然なことだっただろう。しかし、フッサールが学問の基礎づけという動機から超越論的還元を構想したのに対して、マルセルは、観念論や合理主義への批判から、第二の反省による「回復」に到達した。また、問題から神秘へと主体の内部に向かって超越していく運動に対応するものは、フッサール現象学の中にはない。両者の違いは明らかである。ということは、リクールが、直接的経験への回帰という方向性に自らの哲学を推し進めようとする中で、哲学と信仰の境界線を守り、哲学の限界内にとどまるために必要なものをフッサールの中に見出したということであろう。それは現象学的記述という方法であった。

とはいえ、リクルールの現象学についての理解は、現象学者から見ればかなり偏ったものに見えよう。グロンダンによれば、リクールが現象学に魅かれたのは次の二点においてである。「1／事象そのものと意識の諸体験へと厳密な注意を向け、それらをまずは還元されない仕方で、「理念型」にしたがう「形相的」な仕方 で記述すること。2／志向性の理論によれば、〈我〉とはみずからに集中するものではなく、つねに何かについての意識であり、意味を指向するものであること。それによって露わになるのは、「反省において対自的になる以前に、自己自身の外へと方向づけられ、意味へと向けられた意識」である」³²。

2.2. 実存的現象学

後年、リクールは、実存主義の支配を背景に展開されたフランスの現象学を「実存的現象学」(phénoménologie existentielle) と紹介している³³。実

存の現象学は「フッサールに由来する現象学的方法と〔コジェーヴとイボリットの〕ポスト・ヘーゲル主義哲学から受けとった実存の問題系との合流点に位置する哲学の思潮である」。実存的現象学は「超越論的現象学と並置される分野」ではなくて、実存の問題系に奉仕する方法である。

各々が置かれている哲学的文脈は異なるとはいえ、固有身体、自由、他者が実存的現象学の主題である。「固有身体」(corps propre) についての現象学的な分析の例として、リクールはマルセルをあげる。「ガブリエル・マルセルにおいて、固有身体という主題には切断と回復の機能がある」。マルセルによる固有身体の記述は、一方で、(世界の中に)位置を持たない匿名の認識主体(コギト)への偶像崇拜を切断し、他方で、具体的なものの、個人的かつ全体的な経験を回復するという機能を果たす。しかし、マルセルの実存的現象学が実存あるいは「受肉」の哲学と同一視できるように思われるそのときに、マルセルは「忠実」、「希望」などの存在論的神秘の探求によってそれを補償しようとする。したがって、「固有身体」の現象学は、具体的なものへの根づきの回復と存在論的神秘の対極という両義的な役割を果たしている」³⁴。こうして、実存的現象学は、超越論的現象学と存在論との間を推移する、とリクールは結論している。

マルセルの「実存的現象学」は、実存を回復するために存在論的神秘の探求という迂回路をへるという図式をとることから、認識論と存在論の両義性をもつ。この両義性が直観によって支えられていることは、見方によっては、厳密性に欠けるということもできるだろう。Ihde は、リクールがマルセルから離れた最大の理由は「マルセルの方法の不正確さに不満」をもっていただかだとしている。「マルセルとともに学びながら、リクールはフッサールの哲学を研究し続けた。求められたのは、形而上学日記に比べてもっと体系的で厳密なアプローチであった」³⁵。リクールは、『G・マルセルとK・ヤスパース』(1948)において次のように述べていた。

超越性 (Transcendence) の実存哲学が古典的な議論を繰り返すことができるのは、その認識論的な不完全性を再び作業台に載せるという条件においてでしかない、特に思惟の非数学的で非経験的な諸形式についてのより厳密な反省、すなわち理念の対象にあるいは経験的な対象に還元されない客観性の諸側面についての厳密な反省と引き換えでしかない。フッサールの仕事は、G・マルセルが力を込めて批判した知性の少し狭い概念を拡大するために大いなる助けとなる。G・マルセルの思想がその実存的な特性だけでなく、哲学的な厳密さを肯定することを約束されるのは、おそらく盲目的な直観としての愛の哲学と劣化していない知性の哲学との合流点においてであろう³⁶。

ここで、リクールが「マルセルが力を込めて批判した知性の少し狭い概念」と述べているのは、「抽象の精神」あるいは第一の反省のことであろう。リクールは、マルセルの問題設定を維持しながらも、マルセルが抽象の精神への過剰な否定によって知性の可能性のすべてを放棄してしまっていることを批判し、その「認識論的な不完全性」を補うために、フッサールの「厳密な反省」と知性の哲学を求めたということであろう。

2.3. 意志的なものと非意志的なもの (1950)

リクールがフッサール現象学に移行したということは、単純に、マルセルの弟子であることを止めて、フッサールの弟子になったということではない。リクールは、マルセルとフッサールの間に身を置き、両者の相違を無視することなく、それぞれの哲学を構成している諸要素を識別することに配慮した。マルセルとフッサールの間で引き裂かれたことは、リクールを彼らの単なる弟子に留まらず、リクール独自の思想が構築されるのを助けた³⁷。リクールが独自の思想を展開し始めたのは、1950年に出版された『意志的なものと非意志的なもの』においてである。解釈学の視点からリクルールの哲学を考察しているグロンダンには、「リクルールの思想は反省

哲学、人格主義、実存主義に根をもっており、最初に（おそらくその後もずっと）作業場としたのは意志の哲学であった。そこから出発して、後年の仕事では〈為しうる人間 (l'homme capable)〉をめぐる思索へと行きついたのだが、それに至るまでの道程では、人間の諸可能性に何らかの形で関わるあらゆる分野や領域での成果がとり入れられた」と述べている³⁸。

『意志的なものと非意志的なもの』はマルセルに捧げられている。実際、そこに見いだされるのは、受肉や神秘という言葉である。後に、リクールは「私がフッサールに負っているものが、形相的分析という語によって示される方法論だったとしたら、マルセルに負っているものは、主体の問題系であった」と振り返っている³⁹。主体の問題系を形相的分析に接合するために、リクールがとったのは次のような戦略であった。

彼〔マルセル〕の思想は、対象による思惟の炸裂や、「客観性」から「実存」への転換、あるいは後の彼の言い方言えば、「問題」から「神秘」への転換に、受肉の再発見を結びつけている。事実、本書のいろいろな分析の源には、ガブリエル・マルセルの著作の省察がある。それにもかかわらず、われわれはその考え方を、古典心理学によって提起された精確な問題（欲求とか習慣等々の問題）によって吟味しようと思った。他方では、われわれは、私の身体の神秘に養われている思惟の要求と、記述というフッサールの方法から受け継いだいろいろな区別を重んずる考え方の要求という、その二つの要求の交差点に身をおこうと思ったのである。⁴⁰

実存と存在論的神秘という観点から見直されるとき、「私の身体」は受肉として現れる。そこにおいて見出されるのは、「受肉せる自由という生き生きした体験」であった。リクールは、このような体験を解明してくれることをマルセルに期待したが、得られなかった。マルセルに失望したり

クールは、フッサールに大きな期待を寄せる。

哲学の使命は、実存そのものを概念によって解明することだともいえる。まさにその仕事に、記述的現象学が向いているのだ。記述的現象学はロマンチックな心情吐露 (*l'effusion romantique*) と深みのない主知主義とを分ける稜線である⁴¹。

「ロマンチックな心情吐露」がマルセルを指しているかは明らかでない(『G・マルセルと K・ヤスパーズ』(1948)では、抒情性 (Lyricism) と語っていた)。いずれにせよ、過度の心情論と過度の知性主義・合理主義のどちらにも属さず、第三の道を探ろうとするリクールの立場をよく表しているよう。

『意志的なものと非意志的なもの』の研究目的は、意志的なものと非意志的なもの(欲求、情動、習慣等)との基本構造を記述し了解することである。記述によって最初に明らかになったのは、意志的なものと非意志的なものとの相互関係である。

欲求や情動、習慣等々が完全な意味をもつのは意志と結びついてでしかないのであって、それらは意志を促し、傾け、一般的に言って影響を与えるが、そのお返しとして意志はそれらの意味を定着させる、つまりはおのれの選択によってそれらを限定し、おのれの努力によってそれらを動かし、おのれの同意によってそれらを採用するのである。非意志的なものに固有の可知性というものはない。意志的なものと非意志的なものとの関係だけが可知的なのだ⁴²。

意志的なものと非意志的なものの相互関係を記述するために、リクールは意志の作用を三つに分節する。すなわち、(1) 私は決意する、(2) 私は私

の身体を動かす、(3) 私は同意する、である。意志されたものとは、私が決心していること、すなわち企投 (projet) である。しかし、企投は非実在的なものであるがゆえに、それを行為によって実在的なものに変える必要がある。さらに、意志の働きは、自分が企投することも動かすこともできない必然性に対して同意を与えなければならない。こうして、意志の働きのそれぞれの局面において、意志的なものと非意志的なものとの関係が記述されることになる。

受肉した意志の形相的記述によって、実存の概念はマルセルによって示されたものに比べて、より豊かな内容を獲得したことは明らかであろう。現象学的な記述という迂回を通して、実存が再び発見されているのである。ところで、『意志的なものと非意志的なもの』(1950)の序文で、リクールは、同書が「意志の哲学」(Philosophie de la volonté)の第一部にあたることを明らかにしている。実際に、意志の哲学の構想が示されたのは、続く第二部『有限性と有罪性』の第一巻『過ちやすき人間』(1960)の序文においてである。構想によれば、意志の哲学は、意志の〈形相論〉、意志の〈経験論〉、意志の〈詩学〉の三部から構成される。意志の〈形相論〉が第一部『意志的なものと非意志的なもの』(1950)である。意志の〈経験論〉は、さらに狭義の〈経験論〉、〈象徴論〉、〈隷属意志論〉の三つに分割される⁴³。狭義の〈経験論〉が第一巻『過ちやすき人間』(1960)として、〈象徴論〉が『悪の象徴系』(1960)として出版された(しかし、〈隷属意志論〉と意志の〈詩学〉は出版されなかった)。『過ちやすき人間』では、意志の哲学の構想が示されただけでなく、研究対象と方法が『意志的なものと非意志的なもの』とは異なっていることが説明されている。過誤や悪が研究対象となり、これらの検討のためにナベールに依拠した反省の方法が用いられたこと、さらに続巻となる『悪の象徴系』では解釈学が導入されることも予告されている。ということは、リクール独自の意志の哲学は人格主義、実存主義から現象学に至っても、そこにとどまるものではないことを 1950-60

年の時点で予定していたことになる。なぜリクールは「フッサール現象学の圏内にとどまる」だけで満足せず、さらにその先に、あるいは別の方向に向かう必要があったのだろうか。

3. 現象学から反省哲学へ

3.1. 反省哲学

リクールは自らの思想形成を次のように説明している。「私は、ガブリエル・マルセルとヤスパースの影響とフッサールの影響を統合しようとした。さらに、主に心理学によって代表される人間科学に向き合わなければならなかった。次に、伝統的哲学、主に反省哲学の精神の内に再び自分自身を根づかせる必要を感じた」⁴⁴。リクールが反省哲学を必要とした理由は、「過誤や人間悪の全経験」について検討しなければならなかったからである。

リクールは現象学的方法による純粹記述には限界があることをすでに理解していた。そのため、『意志的なものと非意志的なもの』では、意志的なものと非意志的なものの相互関係の記述と了解のために、過誤 (faute) と超越性 (Transcendance) をひとまず「カッコに入れ」(en mettant entre parenthèse) ていた。その理由は、「純粹記述の領野を限界づけるため」である。しかし、純粹記述の作業が済んだ後で、意志の哲学を完結させるために、これらに対する「カッコを取り外す」ことになったのである⁴⁵。抽象的に記述された人間と違って、生身の人間は自由であると同時に、過誤や悪を犯す。過誤の可能性、即ち「可謬性」(faillibilité) が人間存在の本性の中に刻み込まれていると言えるほどである。問題は、この記述し得ないものをいかに理解し、どのようにして哲学的言説へともたらすことができるかという点である。そのためにリクールが援用したのは、反省哲学の伝統であった。

リクールと反省哲学との出会いは、1934年にブランシュヴィックのもとで修士論文《ラシュリエとラニョーにおける神の問題》を準備していた

時にさかのぼる。後年、リクールは、ラシュリエとラニョーによって「フランス反省哲学の伝統に入門し、その一員となった」と回顧している⁴⁶。この年にマルセルは、ルイ・ラヴェル、ルネ・ル・センヌとともにコレクション《精神の哲学》を創設する。このコレクションの目的は、当時隆生であった実証主義に対して、フランス哲学の伝統である反省哲学の伝統を対置させることにあった。マルセルが直接語っていないため、彼の思想と反省哲学との関係は不明だが、《精神の哲学》の創設はリクールにも多少の影響を与えたように思われる。

反省哲学の伝統の中でリクールが敬愛してやまないのはナベールである。ナベールとの出会いの経緯と日時は不明である。ナベールは、1924年に『自由の内的経験』を出版していた。当時11歳のリクールがこの本を読んだとはとても思えない。ナベールがリクールに「最も決定的な仕方」で影響を与えるのは、1950年代から60年代である。『過ちやすき人間』は、マルセル、フッサールに代わって、ナベールの著作に多くを負っている⁴⁷。

ここで、フランス哲学における「反省」概念について確認しておきたい。新プラトン派によって「反省」が「知性が反転して自己に向かう作用」とされて以来、17世紀のデカルト、ロックからカント、ヘーゲル、現象学に至るまで、西洋哲学においてはさまざまな反省概念が提示されてきた⁴⁸。特にフランス哲学においては、デカルトが科学的世界知の究極的基礎づけを自己意識の確実性に求めた一方で、メヌ・ド・ビランが経験の事実を考察する方法として反省を採用して以来、反省哲学の伝統が形成された。その伝統は「メヌ・ド・ビラン以後、ラヴェッソン、ラニョー、ラシュリエ、ブランシュヴィック、あるいはベルクソンを介してル・センヌ、マルセル等につながっていくものであったと言えよう」⁴⁹。そして、『意志的なものと非意志的なもの』も、ナベールによって現代の反省哲学の展開として位置づけられる。反省哲学における「反省」とは、まず、主体自身を

構成し、その後で主体の諸作用に内在しながら、あらゆる領域での精神の活動の法則、規範を捉え直すことである。ナベールによれば、反省に固有の特徴は「精神を常にその活動と所産において考察する」とともに、「主体が自己を確信する根源的作用において考察すること」である⁵⁰。リクールの反省概念も、ナベールのそれに忠実である⁵¹。

3.2. 人間の可謬性

『過ちやすき人間』において、リクールは、過誤の可能性、即ち「可謬性」(の原因)が人間の自己自身との不一致、「自己と自己の不均衡」(disproportion)にあるという見立てのもとで、感性的なものと理性的なものそれぞれのレベルで、言い換えれば前哲学的なレベルと哲学的なレベルでこれらを検討し、二つの検討を照らし合わせる(「乖離を徐々に埋める」という手順で作業を進める。感性的なもの・前哲学的なものが検討されるのは、自己と自己との不一致がまずは感情において開示され、そこにおいて前了解という仕方、過誤の可能性の全体像が示されていると考えるからである。かくして、「悲惨」というパトスが、プラトンやパスカルのテキストを導きの糸としながら、「反省」され掘り下げられる。そこにおいて見出されたのは、過誤の可能性が未分化な仕方、いわば「星雲」のようなものとして与えられているということであった。次にこの「悲惨」の星雲を判明な形象へと分節化するために、哲学的分析へと移行する。ここでは主にデカルトとカントのテキストが検討される。こうして明らかになったことは、人間を可謬的であるというとき、「本質的には、道徳的悪の可能性が、人間の素質の中に刻印されているということである」⁵²。哲学の伝統においては、「被造物の限界が、道徳的悪の機会であることを意味している」。そして、この被造物の限界は「人間存在にとって自己自身と一致することのないという特殊な限界」である。このようにして得られた結論は、新たな探求の入り口となる。新たな探求とは、「意識のなす告白と、その告白を表現している悪の象徴を対象にした新しい型の反省」で

ある⁵³。というのも、無垢から過失への移行を読み解く鍵は「神話」の中にあるからである。神話において悪は告白されるが、その「告白の言語」は象徴的である。「それは、汚れ・罪・有罪性について、直接的な固有の言葉では語らず、間接的な、比喩的な言葉で語る。告白の言語を理解することは、解説の規則を求める象徴の釈義学、即ち解釈学を駆使することなのである」⁵⁴。

可謬性についてのリクールの分析とナベールの反省哲学とのつながりを素描するならば、およそ次のようなものになろう。自由から悪の問題を説明するだけでなく、自由が悪を自らのうちに取り入れ悪の刺激によって自由を拡大し深化するという思考のモデルをナベールの著作の中に見出した、とリクールは述べている。このような思考のモデルが、過誤に対して適用されるとどうなるのか。リクールはそれを時系列で説明する。

過失の意識においては、まず過去と未来という時間的な二つの《脱字》の深い統一が現れる。投企の前への飛躍は、回顧を担っている。逆に、悔恨における過去に苦しむ沈思は、再生の可能の確信と一つになっている。投企は記憶によって豊かにされて、悔悟へと展開する。このように、過失の意識においては、未来は過去を加えようとし、自覚は、とらえなおしとして示され、意識は自分が、前方への投企、飛躍にもっぱら注意するだけの反省によっては認識されないような、厚み、濃密さであることを発見する⁵⁵。

私たちが過誤を犯したとき、後悔の感情を通して、私は自分の中に、いまの自己とあるべき自己との不一致を見出すであろう。このような「自己と自己の不均衡」を解消し、私自身を再生するために、私は未来に向けて新たな企投を行う。このように、未来への企投は回顧をともなっている。未来は、過去の積み重ねであり、その都度自分をとらえ直すことであり、

このようにして意識は厚みと濃密さを増していくのである。

この「あるべき自己」とは何であろうか。それは、おのれの過誤を反省するときに、措定されるが、しかしその内容は私には隠されている。その姿が明らかになるのは、「その活動と所産」、すなわち未来への企投とそれが生み出したものを通してでしかない。ナベールは、このような自己のダイナミズムの根底に、自己の存在についての「根源的肯定」を見出している。

3.3. 反省における迂回と帰還

ナベールによって提示されリクールによって継承されたもの、すなわち、自己と自己の不一致の自覚とその解消による自己の再生という道筋、また、初めに措定された自己（あるべき自己）がその活動と所産を通して、自らを自覚し、その内容を豊かにしていくというダイナミズムは、倫理的反省一般に妥当するものではないだろうか。「吟味されない生活は人間の生きる生活ではない」（『ソクラテスの弁明』38a5）と言われる。よく生きるために反省は不可欠である。しかし、この「反省」は、自己が自己を直接的に眺めるということではなく、過失や挫折といった否定的な経験を迂回して再び自己に帰還するという動的な過程ではないだろうか⁵⁶。

ここまで、われわれは、マルセルの実存哲学から出発して、フッサールの現象学へ移行し、さらに反省哲学へと展開したリクールの思想の道程を辿ってきた。実際の思想形成は、このように直線的に進行したのではないかもしれない。しかし、われわれが直線的な再構成の図式を採用した理由は、現象学的記述を迂回することによって、再び実存へ帰還し、反省哲学を迂回することによって再び実存へ帰還し、そのような迂回と帰還を繰り返すことによって、実存の理解がより豊かなものになるという構造を示すためであった。このような迂回と帰還によって実存の理解を充実させることが、リクールの思想を貫く根本的なモチーフであるとわれわれは考える⁵⁷。

フッサールの現象学、ナベールの反省哲学へと展開されたことを見ると、リクールの思想は、マルセルの思想から大きく隔たってしまったように見える。しかし、そのような変化にもかかわらず、リクールの思想に一貫していたのは、実存と人間の可能性への関心である。「悪をなすこと」ですら、人間の可能性のひとつとみなすことができるのである。グロンダンは、リクールにおける「人間の可能性への関心」の大きさを次のように述べている。

人間の可能性というとき、現代の読者は、物事を企て、自然を認識し支配するという人間の征服的な能力のことだと考えるかもしれない。もちろんそれも人間の能力の一部ではあるが、可能性という語は別のことも意味するはずである。つまり、人間は苦を被ることも、自分が持つ可能性に届かないこともありうる。だから悪をなすこともできるが、同時に行為し、言葉を発し、自分の経験を語り、約束を守り、赦し、神的なものに触れることもできる。人間以外の存在者たちは、これらの可能性を人間と同じ形ではもっていない。だが、私たちが形づくる〈存在しようとする努力〉は、これらすべての可能性によって規定されているのである。

リクールの広やかな思索は、この存在しようとする努力が果たしうるすべてのことへと、とりわけこの努力が自らの経験を語る言葉を通してなしうることに注意を向ける。彼の思索が解釈学となるのはそのためである⁵⁸。

苦を被ること、自分の可能性に届かないこと、悪をなすこと、行為し、言葉を発し、自分の経験を語り、約束を守り、赦し、神的なものに触れること、人間のこれらの可能性はどれもマルセルによって何らかの形で検討されている。これらの可能性によって規定される〈存在しようとする努

力〉は、マルセルの言葉でいえば、「存在論的要求」になるであろう。第二の反省は、存在論的神秘の探求という迂回路を経て、実存に帰還し、実存に豊かな内容を回復するためのものだと解釈することも可能であろう。「私は、フッサールやナベールと同じくらい、ガブリエル・マルセルを私の数少ない師の一人とみなしている」とリクールは述べている⁵⁹。リクールが自覚している以上に、マルセルの影響は大きいのかもしれない。

結論

リクールの思想は、マルセルの実存思想から出発した。しかし、第二の反省についての解釈と哲学と信仰の関係についての見解の相違から、リクールはマルセルの思想を離れた。その後、リクールは、意志の哲学という独自の思想を構築する過程で、現象学、反省哲学の方法を取り入れた。このような変化によっても変わらないリクールの思想の基本的なモチーフは、実存と人間の可能性への関心である。リクールは現象学と反省哲学を迂回路として、実存へと回帰し、人間の可能性の理解を深めていったと考えられる。反省哲学とリクールの関係を考察したことは、倫理的反省の重要な側面を明らかにしてくれるという、もう一つの成果をわれわれにもたらした。それは、倫理的反省が迂回と帰還という構造をもっているということであった。

注

¹ Ricœur 1986 :25.

² リクールとマルセルの関係を知るための参考文献は 4 つのタイプに分類できる。1) リクールとマルセルの対話：Ricœur 1968. 2) リクールがマルセルの思想について論じたもの：Ricœur 1948. Ricœur 1976. Ricœur 1984. 3) 自伝的テキスト：Ricœur 1995. Ricœur 2013. 4) リクール思想研究（二次文献）：Dosse 2001. Ihde 1971. Blundel 2010. Bourgeois 1995. Farges 2017. 久重 1979. 杉村 1998. 杉村 2016.

³ Ricœur 1995 :15.

- ⁴ Dosse 2001 :29.
- ⁵ Ricœur 1984 a:51.
- ⁶ Dosse 2001 :28
- ⁷ Marcel 1951 :121.
- ⁸ Marcel 1927: 322.
- ⁹ Marcel 1927 :316. Marcel 1964 : 44.
- ¹⁰ Marcel 1927 :Xi.
- ¹¹ ibid.
- ¹² Ricœur 1968 :65.
- ¹³ Marcel 1959 :.20.
- ¹⁴ Ricœur 1968 :44.
- ¹⁵ Marcel 1935: 169
- ¹⁶ 服部 1974:320.
- ¹⁷ Marcel 1949 :56.
- ¹⁸ Marcel 1951 :91.
- ¹⁹ Ricœur 1984a :49.
- ²⁰ Ricœur 1984a :50.
- ²¹ Maracel 1935 :162. Ricœur, 1984b:491.
- ²² Marcel 1949:69.
- ²³ Marcel 1944
- ²⁴ Ricœur 1948 :403–7.
- ²⁵ Spiegelberg 1976 :570–1.
- ²⁶ Ricœur 1976b :70–1. Ricœur 1984b:489.
- ²⁷ 杉村 2008 :190.
- ²⁸ Marcel 1935 :149.
- ²⁹ 通説が基づく研究として以下を参照. Spiegelberg 1976. ヴァルデンフェルス 2009. 近年の再解釈については以下を参照. Dupont 2014. 八重樫 2020.
- ³⁰ Speigelberg 1976:443.
- ³¹ Dupont 2014:159.
- ³² グロンダン 2014:29–30.
- ³³ Ricœur 1957.
- ³⁴ ibid.
- ³⁵ Ihde 1971:9.
- ³⁶ Ricœur 1948 :369–70.
- ³⁷ Dosse 2001 :23.
- ³⁸ グロンダン 2014: 8.
- ³⁹ Ricœur 1995 :24. Ricœur 2013 : 21, 35, 41–44.

- ⁴⁰ Ricœur 1950:18.
- ⁴¹ Ricœur 1950:20.
- ⁴² Ricœur 1950:8.
- ⁴³ Ricœur 1960 :9–13. 鹿島・超門・川口 2016 :301.
- ⁴⁴ Ihde 1971 :xiii–iv.
- ⁴⁵ Ricœur 1960:9.
- ⁴⁶ Ricœur 1995 :15.
- ⁴⁷ Ricœur 1960:15.
- ⁴⁸ 新田 1998: 1298–9.
- ⁴⁹ 久重 1979 :3.
- ⁵⁰ Nabert 1957 :19.04.15.
- ⁵¹ Ricœur 1984c :322.
- ⁵² Ricœur 1960 :149
- ⁵³ Ricœur 1960 :159
- ⁵⁴ Ricœur 1960 :10-1
- ⁵⁵ Ricœur 1960 :16
- ⁵⁶ リクール 1996: XV
- ⁵⁷ cf. Blundel 2010.
- ⁵⁸ グロンダン 2014 :9.
- ⁵⁹ Ricœur 1976a : 92.

文 献

- Blundel, Boyd. 2010. *Paul Ricœur between Theology and Philosophy Detour and Return*. Indiana University Press.
- Bourgeois, P.L.1995. Ricœur and Marcel An Alternative to Postmodern Deconstruction. *Bulletin de la Société Américaine de Philosophie de Langue Française* Vol.7(1/2) . 164–175.
- Dosse, François.2001. *Paul Riceur les sens d'une vie (1913–2005)*. Éditions La Découverte.
- Dupont, Christian. 2014. *Phenomenology in French Philosophy : Early Encouters*. Springer.
- Farges, Julien. 2017. L'héritage de Gabriel Marcel: Paul Ricœur et la question des

- limites de la phénoménologie. *Philosophie* n.132. 31–43.
- Ihde, Don. 1971. *Hermeneutic Phenomenology: The Philosophy of Paul Ricœur*. Northwestern University Press.
- Marcel, Gabriel. 1927. *Journal métaphysique*. Librairie Gallimard.
- Marcel, Gabriel. 1935. *Être et Avoir*. Aubier Montaigne.
- Marcel, Gabriel. 1944. *Homo viator*. Aubier Montaigne.
- Marcel, Gabriel. 1949. *Position et approches concrètes du mystère ontologique*, J.Vrin.
- Marcel, Gabriel. 1951. *Le Mystère de l' Être I réflexion et mystère*. Aubier Montaigne.
- Marcel, Gabriel. 1959. *Présence et Immortalité*. Flammarion.
- Marcel, Gabriel. 1964. *La dignité humaine et ses assises existentielle*. Aubier Montaigne.
- Nabert, Jean. 1957. La philosophie réflexive, In *Encyclopédie française* (vol. XIX, Chapitre II. Les philosophies de la réflexion, 19.04.15).
- Ricœur, Paul. 1948. *Gabriel Marcel et Karl Jaspers*. Édition du Temps Présent.
- Ricœur, Paul. 1950. *Philosophie de la volonté 1 Le volontaire et l'involontaire*. Aubier.
- Ricœur, Paul. 1957. Phénoménologie existentielle. In *Encyclopédie française* (vol. XIX, Chapitre IV. L'attitude phénoménologique, 19.10.8).
- Ricœur, Paul. 1960. *Philosophie de la volonté 2 Finitude et culpabilité, 1.l'homme faillible*. Aubier.
- Ricœur, Paul. 1965. *De l'interprétation, essai sur Freud*. Édition du Seuil, 1965.
- Ricœur, Paul. 1968. *Entretiens Paul Ricœur-Gabriel Marcel*. Aubier-Montaigne.
- Ricœur, Paul. 1976a. Entre Gabriel Marcel et Jean Wahl. In *Lecture 2 La contrée des philosophes*. Ricœur, Paul. 1992. Édition de Seuil.
- Ricœur, Paul. 1976b. Gabriel Marcel et la phénoménologie. In *Entretien autour de*

Gabriel Marcel, Éditions de la Baconnière.

Ricœur, Paul. 1984a. Réflexion primaire et réflexion seconde chez Gabriel Marcel.

In *Lecture 2 La contrée des philosophes*. Ricœur, Paul. 1992. Édition de Seuil.

Ricœur, Paul. 1984b. Gabriel Marcel and Phenomenology. In *The Philosophy of Gabriel Marcel*, eds. Schilpp, P.A., Hahn. L.E. Open Court Pub. Co.

Ricœur, Paul. 1984c. *Le Conflit des interprétations, Essais sur l'hermèneutique I*. Éditions du Seuil.

Ricœur, Paul. 1986. *Du texte à l'action, Essais sur l'hermèneutique II*. Éditions du Seuil.

Ricœur, Paul. 1995. *Réflexion faite, Autobiographie intellectuelle*. Édition Esprit.

Ricœur, Paul. 2013. *La Critique et la Conviction Entretien avec François Azovi et Mark de Launay*. Librairie Arthème Fayard /Pluriel.

Spiegelberg, Herbert. 1976. *The Phenomenological Movement, a historical introduction*. Martinus Nijhoff.

ヴァルデンフェルス, ベルンハルト. 2009. 『フランスの現象学』. 佐藤真理人監訳. 法政大学出版局.

鹿島徹・超門勝彦・川口茂雄編. 2016. 『リクール読本』. 法政大学出版局.

グロンダン, ジャン. 2014. 『ポール・リクール』. 杉村靖彦訳. 白水社.

杉村靖彦. 1998. 『ポール・リクールの思想 意味の探索』. 創文社.

杉村靖彦. 2008. 「III マルセル」. 『哲学の歴史 第12巻 実存・構造・他者【20世紀III】』. 鷲田清一編. 中央公論新社.

杉村靖彦. 2016. 「現代思想の交差点としてのリクール：二十世紀の哲学的証人」. 『リクール読本』. 鹿島徹/超門勝彦/川口茂雄編. 法政大学出版局. 77-84.

新田義弘. 1998. 「反省」. 『岩波哲学・思想事典』. 廣松・子安・三島・宮本・佐々木・野家・末木編. 岩波書店. 1998.

- 服部英二, 1974. 「ガブリエル・マルセルの思い出—その人と思想—」.
『理想』, No.499.
- 久重忠夫, 1979. 「「反省」概念の転回—マルセルとリクール—」. 『専修人
文論集』, 23:1-24.
- モンジャン, オリヴィエ, 2000. 『ポール・リクールの哲学—行動の存在
論』, 久米博訳, 新曜社.
- 八重樫徹, 2020. 「現象学の転回」. 『現代フランス哲学入門』, 川口茂雄・
越門勝彦・三宅岳史編著, ミネルヴァ書房, 162-3.
- リクール, ポール, 1996. 『他者のような自己自身』, 久米博訳, 法政大学
出版局.